令和4年10月1日

東京ごみ戦争とは？

杉並区立高井戸中学校 １・2年

東京ごみ戦争は、昭和４１年１１月１４日新聞に折り込まれた杉並区高井戸に清掃工場を建設するというチラシから全ては始まったのです。当時は高度経済成長期、大量生産、大量消費、大量廃棄のサイクルが構築されていた頃。ごみはどんどん急増しごみの処理が追い付かないでいました。埋立地として、廃棄される大半のごみを受け入れていた江東区では、汚汁をまき散らすごみ収集車が１日に５０００台以上も走り回り、環境、衛生問題が深刻化。都は区ごとに清掃工場を作る計画をたてましたが、高井戸住民が反発し計画は全く進みませんでした。のちに美濃部元東京都知事が「東京ごみ戦争」を宣言。昭和４７年と４８年に江東区が2回、杉並区のごみ搬入を阻止しました。昭和４９年にようやく杉並清掃工場建設について東京都と住民が和解し、杉並清掃工場本体工事着工に至ることができました。足かけ9年に及ぶ都と区民とごみの戦いでした。

杉並区、江東区、東京都の関係性をざっくり図解！

高井戸の人たちの思い

お父さんが反対運動の中心メンバーだった内藤博孝さんは、
私たちの質問にこう答えてくれました。

Ｑ１　清掃工場建設になぜ反対したのか?
ごみは嫌い、話し合いもなしに勝手に決定されてしまった、高井戸の豊かな自然を破壊するなということから清掃工場建設に反対した。

Ｑ２　反対同盟はどのようにしてできたのか?
不満を持つ人が自然と集まってきて、合計２万筆の反対の署名が集まったことから結成された。

Ｑ３　反対活動での苦労とは?
江東区にごみを拒絶され、他の区、杉並区の高井戸以外のところからも誹謗中傷が殺到した。

Ｑ４　清掃工場建設にあたってどのような条件をつけたのか?
お願いはしたが条件はつけていない、都が清掃工場を建設するために反対同盟にとって良い条件を出してきた。「西ドイツにあった当時最先端の技術を使う」「これ以上ないものを作る」などと都がどんどん提案してきたため反対同盟は最終的に和解した。

Ｑ５　未来を担う子供たちへのメッセージをお願いします。
昔から高井戸は意思表示が強い場所。いやなことを「いや」と言えるようになってほしい。

杉並正用記念財団 常務理事
内藤博孝さん

清掃工場建設までの道のり

杉並清掃工場　技術課長
井上 宏さん

「東京ごみ戦争」について知るために今の杉並清掃工場の技術課長である井上宏さんに質問をしました。
杉並区に清掃工場を作ることになったのは、３０年代後半に景気が上がった高度経済成長期に、大量生産、大量廃棄でごみが増えましたが、清掃工場が整備されていなかった。またごみが放置されていることにより虫が大量に発生するなどの様々な問題があり、各区に清掃工場を作る必要があったからだそうです。
候補地の中から、なぜ高井戸が選ばれたのかについては、元々は西田町に清掃工場が作られる予定でしたが、西田町の面積では足らず、十分に土地の確保のできる高井戸が選ばれました。反対運動をしていた住民とは、未来の子供たちのための話し合いをしたそうです。
公害などが発生しないためにどのような対策を清掃工場は取ったかについては、地下トンネルを作ってごみ収集車が住民と同じ道路を走らないようにしたそうです。その他にも、当時、世界でも最先端の技術を取り入れて工場は作られたそうで、煙突を見て煙が出ているイメージは少ないと思います。
清掃工場の入り口には模型が置いてありますが、模型は２３区どこの清掃工場にもあって、来た人に工場のことをわかりやすく伝えています。

昭和４１年頃（高度経済成長期）東京都のほぼ全てのごみを受け入れていた江東区。ごみ収集車から汚汁がまき散らされ、悪臭が区に漂い、渋滞で事故が起き、江東区民は日々危険にさらされていた。その当時、ごみ処理は、ごみの上にただ土をかぶせていただけだったので、蚊やハエが大量発生。殺虫剤を毎週のように大量にまき、小学生たちは、ハエたたきを片手に学校に登校していたそうです。

江東区清掃リサイクル課長
瀧澤 慎さん

当時の江東区民の思い

汚汁問題に加えて、収集車大量侵入が問題になったので、江東区の人たちは、「ごみを大きな車に詰め替えて、江東区に入ってくる収集車を減らしてほしかった」そうです。他にも、当時はごみを未処理のまま埋め立て、悪臭の原因になっていたので、埋め立てる時に土をかぶせるだけでなく、ごみを埋めて、その上から虫や、悪臭が発生しないようにしっかりと土をかぶせる様な対策を取ってほしかったそうです。それに加え、ごみを江東区だけに押し付けないでほしかったという思いもあったそうです。

ハエ大量発生ミニエピソード！

ある日布団を外に干しているとシーツが黒くなっていたそうです。当時はすすがあったので、すすを払おうと布団をはたくと黒色の正体は何百何千のハエだったそうです。

昭和４０年代のごみ収集車。
現在と違い、
トラックみたいですね。

「東京ごみ戦争」の教訓

いまの高井戸にある清掃工場は、建て替えをしてからいろいろな取り組みがわかる工場になっています。清掃工場は自然エネルギーを利用した空調設備、清掃工場内での発電など地球温暖化の防止にも取り組んでいます。また最新鋭の公害防止設備や屋上緑化など地域環境に配慮した設備になっています。そして、清掃工場敷地内に地域住民が自由に使えるウォーキングロードや足湯など地域住民の健康を保つ場所や憩いの場所を作られています。
そのほかに、清掃工場内入り口付近に、「東京ごみ戦争歴史みらい館」を設置し、ごみ戦争の状況を伝える映像や資料を展示し、子供と歴史をつなぐ場所を作っています。そしてごみ戦争後、人々のごみに対する意識が大きく変わり住民と協力しながら清掃事業を進めていく大切さが幅広く認識されました。清掃工場は「地域にとけこみ、信頼される清掃工場」として循環型社会の形成に向けた取り組みをしています。隣接する区民センター内の図書室には「次世代の子供たちの環境」をテーマにした子供向けの読書スペースがあります。
このような施設から高井戸住民の思いは次世代の子供たちに受け継がれています。

取材メンバー

鬼束 さん（1年）

今回の「東京ごみ戦争」について調べるという貴重な体験をさせて頂いた中で私は、ごみについての考え方が変わりました。
普段、利用している高井戸地域市民センターは、図書館やプールに行きたいという「遊び」の場として考えていた場所なのですが、今回は「遊び」ではなく「学び」の場として杉並清掃工場でお2人のお話を聞き、今まで知らなかった「東京ごみ戦争」を知れました、杉並清掃工場の歴史についても学ぶことができました。これから生活の中でたまにごみ清掃車を見た時にふと「東京ごみ戦争」について思い出したりし生活しながらごみをなるべく出さないようにしていきたいです。

小林 さん（1年）

新聞を作っていく中で、色々な方のお話を聞いて、街頭インタビューをして、逆にインタビューされて、新聞作りはとても緊張して大変でした。緊張しつつも、取材をする中で、私は、「身の回りの物がどう処理されていくのか」ということを考えることが大切だと感じました。なぜなら、今回のごみ戦争も突き詰めてみれば、各区の住民がごみの行方を知らず、目の前からごみが消えてしまえばそれでいい。と思っていたから、江東区の現状に手を差し伸べられず、共感すらできなかったと思うのです。だから、東京ごみ戦争を教訓にして自分の家から出たものが、どう処理されているか知ろうとすることは大切だと感じました。私も、まずは自分の区の清掃工場はどこにあるのか、そして最終処分場はどこにあるのか、学んでみたいと思いました。

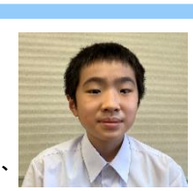
竹中 さん（1年）

私は、東京ごみ戦争の取材活動に参加し、杉並区が抱えていたごみ問題について知ることができました。
清掃工場を建てる際に区民から反対の声があがったことや、東京都のごみの大半を江東区がになっているなんて知りませんでした。
実際に街頭インタビューをした結果、ごみ戦争について知っているという人が１８人中２人しかいないことにも驚き、もっとたくさんの人にごみ戦争のことを知ってもらい、考えてほしいと思いました。
もっと住みやすい世の中になるために、私もごみ戦争のことを広めていきたいと思いました。

谷尾 さん（2年）

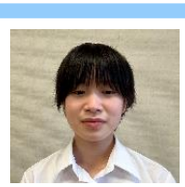
調べるまでは「ごみ戦争」ということがあったことも知らなかったので今回知ることができてよかったです。ごみ戦争は東京都に大きな影響を与え、いろいろな人がごみ問題を知るきっかけになった出来事だとわかりました。色々な立場の方のお話を自分で聞いたからこそわかることもあったし、より詳しくごみ戦争を理解することができました。「ごみ戦争」という出来事を知れたのもあるけれど「えっこくる江東」や「杉並清掃工場」に行くなどして色々な人と関わることができたのは自分のなかでいい経験になりました。ごみ戦争に関わった人が少なくなる中でごみ戦争を色々な世代の人に知ってもらえるきっかけになったらいいなと思いました。

西山 さん（1年）



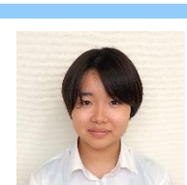
東京ごみ戦争という言葉は小学生の時に清掃工場に見学に行ったことがあり言葉は知っていたけど、どういうものなのかは全く知りませんでした。
調べていくと今は当たり前にある清掃工場を建てるのに住民の方の反対活動などいろいろな苦難があったことがわかりとても驚きました。僕は、調べていっている中で東京ごみ戦争とは何か考えてみました。調べ終わったとき自分なりの考えが出てきました。東京ごみ戦争とは、未来に役立つこと。清掃工場にはいろいろな国が見学に来ているといっていました。東京ごみ戦争ということを見本にして世界の国が清掃工場を作っています。それは東京ごみ戦争が未来に残したものだと思いました。今回学んだことは絶対に忘れないようにし、いろいろな人に東京ごみ戦争を伝えていきたいです。

濱口さん（2年）



昔、杉並区ではごみ戦争ということがあったということを知りました。けれど、それを知っている人はもう、今はほとんどおらず、昔の人がごみの処理方法や自然を守るために尽力してきたことを知らないなんてとても惜しいと思いました。だから杉並区や江東区、東京だけじゃなく、日本中の人に知ってもらいたいと思いました。今を生きている人は、清掃工場があって環境が整っていることが当たり前の生活をし、ごみや環境問題への意識があまりないので、もっと昔の人が残してくれた今に感謝し、環境を守り、未来の人達にも自然を残してあげるべきだと思いました。

松本 さん（1年）



私ははじめ「東京ごみ戦争」と聞いたとき、東京都の中でごみによる抗争が起こったものだと思っていました。しかし、実際は江東区に大量に集まったごみによる被害が増大しそれを当時の都知事が「東京ごみ戦争」と宣言したものでした。当時の江東区は他区のごみをほとんど引き受けそのごみを燃やしたり埋めたりするなどの処理をせずに放置されていたため、生ごみの強烈なにおいやハエなどに悩まされていたそうです。いまでは考えられない日常を知り、とても信じられませんでした。また、江東区清掃リサイクル課長の瀧澤さんの江東区民の苦労とごみ戦争に対する思いを聞いて、ごみはそれぞれの区で処理することが区内の環境を守ることに繋がるのだと思いました。